

---

# 迷えるカノジョとチキンなオレと

リプトン

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

迷えるカノジョとチキンなオレと

### 【Zコード】

N4056Y

### 【作者名】

リプトン

### 【あらすじ】

オレ、庭渡<sup>二ワト</sup> 理桜<sup>リオウ</sup>は私立浪嵐学園で平和で平凡な生活を送っていた。だけど、幼馴染み兼親友で変な「体质」仲間のジローこと坂町<sup>サカマチ</sup>近次郎<sup>キンジロウ</sup>に巻き込まれ（？）、それを手放すことになった。あの時、ジローとさえ行動していなかつたら……。オレオレとジローは執事の秘密を知り、お嬢様に弱点を握られた。さまざまな女の子たちと過ごす学園ラブコメディー。（処女作なので駄作間違いなしですがそれでも良いと言つ方は是非読んでください。）



## プロローグ

side ジロー 幼馴染みで親友の庭渡 理桜と一緒に登校している。俺はこいつの事をリオと呼んでいる。

リオ「なあ、ジロー」

ジロー「なんだ?」

門の前にはリムジンが止まっており、そこには浪嵐学園の有名人二人が立っていた。一人はこの学園の理事長の一人娘である涼月奏。

リオ「なんでスバル様は執事なんてしてるんだろうな?」

リオはもう一人、燕尾服を着た近衛 スバルを指して、そんな疑問を投げてきた。

ジロー「今更な質問だな」

執事。そう、近衛スバルの職業は紛れもなく執事なのだ。あの燕尾服はコスプレなんかじゃないのだ。いや、ね。俺だって初めて聞い

たときは耳を疑いましたよ？ 執事って、なんだよそりゃ。冗談じやない。なんでそんな職業がこの現代社会に生き残つてんだよ。しかも普通に高校に通いやがつて。もういつそのこと天然記念物で も

リオ「メイドだよな」

ジロー「は？」

リオ「いやだつて……スバル様つて……やるなら執事じゃなくてメイドつて感じだろ」

ジロー「はい？」

俺は幼馴染みで親友の言葉に思考を中断させ、目眩を覚えた。

ジロー「おい、リオ。大丈夫か？」

いくら、スバル様が女顔だからってそれは失礼だろ。

リオ「……オレは正氣だ……と思いたい……」

リオは自信無をひびいて言った。この時、俺はリオがおかしくなったと思った。だが、それは俺のおおいな間違いだった。そう、放課後に悪いしらわれることになるのだ。

## オリキヤラ紹介（前書き）

オリキヤラ・リオっちのプロフィールです

## オリキャラ紹介

庭渡 ニワト  
理桜 リオウ

(男)

身長 178cm  
体重 57kg

容姿

- ・顔は中の上
- ・目と髪は灰色。学園時はカツラ（黒）+カラコン（黒）。
- ・髪型はツンツン。

特技

- ・家事全般
- ・リフティング

趣味

- ・昼寝
- ・読書
- ・料理
- ・サッカー

- ・女性
- ・苦手なもの
- ・ホットケーキ
- ・コーヒー
- ・サッカー
- ・好きなもの

・ 同性愛

\*

・ 欧州系のクオーター。母親がハーフ。欧洲系の血を強く色濃く受け継いでしまったので髪と瞳の色が灰色。目立つからと学園ではプライバシーを変装している。

・ 名前は父（友理）の『理』と母（桜）の『桜』を合わせて付けられた。フルネームにコンプレックスあり。

・ とある事件に巻き込まれ、女性恐怖症となってしまった。

## オリキヤラ紹介（後書き）

リオ「ずいぶんと内容の『新しい紹介だな』

リプトン「モロマジ愛嬌つてことで」

リオ「オレの性格とかは？」

リプトン「本編を読んでもらひしかないね」

リオ「いい加減すぎるだろ」

リプトン「しかたないんだって。ボクに文才がないんだから」

リオ「…………はあ…………先行き不安だけどみなさん、こんなんですけどこの小説をよろしくお願いします」

## 第1話

s i d e リオ

ジロー「なあ、リオ」

リオ「なんだ、ジロー」

ジロー「じつじついつなつた?」

リオ「オレが聞きたいぞ」

オレたちは今、理科室に籠城し、小声で会話をしていた。扉の前には机やら椅子やらでバリケードが形成されていた。

リオ「……ただ一つ言えることは……」

ジロー「言えることは?」

リオ「アイツに捕まればdead end直行、間違いない」

不穏な会話をしているよな? けどしかたないんだ。今、オレたち

はこの学園で敵に回してはいけないトップスリーに入っているであらうスバル様相手にリアル鬼ゴッコ中なのだから。なぜ、リアル鬼ゴッコをしてるかつて？ ジローがスバル様のパンツを見てしまつたらしいんだ。運悪くオレもそこに居合わせていたので追われてるんだ。それで、殴ると言つスバル様の家に代々伝わるテンジャラスな執事流記憶消去術から全力で逃れなければならない。捕まつたら記憶どころかオレたち自身がテリートされかねないからな。ってか、オレはなんも見てないのに！

ジロー「し、洒落になつてねえぞ」

リオ「洒落じゃない。マジだ」

オレは近くにあつた人体模型（通称ジョニー）でバリケードを補強

、ドキヤツ！

した瞬間、理科室に響く破碎音。ひどく嫌な予感を感じながら音のした方を見ると、そこには鮮やかに宙を滑空するドアの姿。スバル様がドアを蹴破っていた。様になつてますねえ。

「おおおーー？」

弾け飛んだドアをかわすオレとジロー。そして、がちゃがちゃと音を立てて床にぶちまけられるジョニーの内蔵たち。うわあ、悲惨だ。

スバル「追い詰めたぞ」

ジロー「うああああっ！」

理科室に入つてくるスバル様目掛けてジローは全力でジョニーをフルスイングした。だが、それも虚しく

スバル「なめるな！」

怒号一閃。打ち込まれたスバル様の右ストレートがジョニーの首から上を吹つ飛ばしていた。サヨナラ、ジョニー。オマエのことは忘れないぜ。

ジロー「ふう……」

覚悟を決めたのかジローはゆっくりと拳を構えた。頭部をガード出来るよう両腕をしつかり上げた構え。これはジローに最も向いたスタイル。そう、オレもジローもズブの素人つてわけじゃないんだな、これが。

スバル「やつとやる気になつたみたいだな」

ジローに応えるように、スバル様もファイティングポーズを取つた。ちなみにオレはなんも構えない。だって、逃げるために体力温存しどきたいもん。

スバル「今度こそ仕留めてやるぞ。ボクの『執事ナックル』でな」

リ・ジ「……」

うわあ、ダセエ。なんだよ、執事ナックルって。

ジロー「どうでもいいけど、オマエってネーミングセンスないな

スバル「なつ……何を言つ！　かつこいいだろ！？　ほら、執事ナックル！」

リオ「いや、かつこ悪いよ。執事ナックル」

率直な感想を伝えてやると、スバル様は顔を赤くしてうつむいて唸つ

た。

スバル「くう……」んな侮辱を受けたのは生まれて初めてだ。もつ、許さないぞ。おまえたちには、ボクの必殺技を喰らわせてやる」

リオ「必殺技?」

スバル「そつ、呑ひかけて『ヒンド・オブ・アース』」

ジロー「スケールでけえええつ! 滅ぼしてんじやん、地球うつづつ!」

ジローの渾身のツッコミが決まった。

リオ「やつぱり、そのネーミングセンスはびつかと思つよ」

スバル「う、つむかいない! ボクのネーミングにケチをつけんなー!」

リ・ジ「……」

リオ「うめぐ、オレたちが悪かったよ。オマエだつて、一生懸命考

えたんだよな……」

ジロー「ごめん、俺たちが悪かったよ。おまえだって、一生懸命考  
えたんだよな……」

スバル「ハモるな！ なんだその悟りきつた顔は！ そんな可哀想  
なものを見るような目でこっちを見るなよ！」

くわう……かつこいいと思ったのに……一週間もかけて考えたのに  
……とスバル様は小さな子供みたいに口唇を尖らせて拗ねた。何?  
この可愛い生き物……。

リオ「！？」

気付いた。スバル様の横にある棚。その上にある大きな硝子製のビ  
ーカーが、今にも落ちようとしていた。

ジロー「避けろー！」

ジローが反射的に体を動かしていた。不意に張り上げた声にスバル  
様は口を開けてぽかんとしている。どさりとジローがスバル様を押  
し倒した。そして、オレも落ちてきたビーカーをなんとか掴めた。

リオ「ふう……ってあぶねえ！？」

安堵したのも束の間、他にもあつたビーカーが時間差で落ちてきていた。オレは咄嗟に避けた。ビーカーは呆氣なく碎け破片が散らばつっていた。

スバル「さやああああああ！」

リオ「なんだ？」

女の子みたいな甲高い悲鳴。

ジロー「！」

振り向くとジローが宙を浮いていた。ビーカーの破片を避けるよう理科室の床にダイブしていた。運の良いヤツだ。

リオ「ジ、ジロー？ オマエ、なんで鼻血が……」

ジロー「ジ、ジロー？ オマエ、なんな、どうじて……」

おかしなことに、頸を殴られたはずのジローは、なぜか真っ赤な鼻

血を出していった。ジローは女性に触られただけで、鼻血が出て、最終的には失神してしまうという稀有な体质な女性恐怖症だ。スバル様を見るとはだけた服からは案の定、胸が膨らんでいた。うん、確定だ。スバル様は女だ。やっぱりオレは間違つてなかつたんだ！

スバル「殺す！！」

スバル様が近くに置いてあつた消火器を悠然と構えていた。

ジロー「ちょ、ちょっと待つてくれ近衛さん。そんなので殴られた  
ら、記憶が飛ぶぞ」るじやすまない気がするんですけど……」「

スバル「ああ、そうだ。おまえみたいな変態は、この世界にいちゃ  
いけないんだ……」

ジロー「じつ、事故だ！ あれは事故だつたんだ！」

スバル「何が事故だ。ボクの……ボクの胸を触つて興奮して鼻血ま  
で出したくせに……！」

ジローは腰が抜けて動けないようだ。

ジロー「違つんだって！　俺は興奮して鼻血を出したわけじゃない  
！　これは俺の身体が　」

スバル「問答無用。終わりだ。絶望を噛み締めながら、死ぬがいい」

「ごんつ、

鈍い音がしてジローが倒れた。スバル様はそれでも気がすまなかつたのか連續でジローに消火器をぶつけ続けていた。

スバル「次はおまえの番だ。庭渡 理桜。覚悟しろ」

気がすんだのかターゲットがジローからオレに移つたようだ。いつものオレならスバル様がジローに気をとられてる間に逃げているはず。だけど、オレの身体は震えて言つことをきかなかつた。

『さあ、僕へ。お姉さんと愉しい』としようね~』

迫り来るはだけたスバル様の姿がオレの中の忌々しい記憶と重なつてしまつていたから。

## 第2話（前書き）

紫苑さん感想ありがとうござります。

## 第2話

スバル「可哀想に……そんなに震えなくても大丈夫だ。一瞬で終わらせてやるからっ！」

そう言い、オレ掛けでスバル様は全力で消火器をフルスティングした。

リオ「くつ……！　はあ……はあ……チ、クシヨ」

オレはなんとか頭をガードしたが威力が強すぎて吹っ飛ばされた。不幸なことにビーカーの破片のあつた場所にダイブして腕をぱっくり切つてしまつた。

スバル「……運の悪いやつだな。今ので氣を失ついたらよかつただろうに！」

本当に運が悪い。オレは切つた左腕をきつく握りしめる。くそつ、頭が痛い……呼吸がじづらい……。

リオ「……た、たのむ……はあ……」

くそっ、最悪だ。学園じゃ『いじつ』はならぬようには気を張り続けていたのに！？

スバル「なんだ？ 命乞いか？」

リオ「たのむ、から……はやく、ふくをととのえて、くれ！……はあ……はあ……」

今、オレが出せる渾身の声を出すと、スバル様は自分がどんな格好をしているのか思い出してくれたのか急いで整えてくれた。

スバル「……見たな」

整え終わるとスバル様は親の仇を見るような目をしてそう言った。オレは見せられた側なんですか？…………ああ、でもいつそのこと意識をぶつ飛ばされた方が楽だ。

スバル「おまえもあいつみたいにしてやるからな！」

スバル様が消火器を振り上げた瞬間、どこからともなく声がした。

「そこまでよ」

凜とした声が響いた。声のした方を見ると、スバル様の主である、涼月奏さんがいた。

スバル「お嬢様！！」

奏「スバル。消火器を置きなさい」

スバル「ボクには」いつらを殺す義務が　　」

奏「スバル」

スバル「……わかりました」

主の命令には逆らえないのか、スバル様は渋々、消火器を床に置いた。

奏「そっちの坂町くんは大丈夫かしら？」

リオ「はあ……はあ……ジローなら、むだに、がんじょに、できて、  
るから、だいじょぶだ」

伊達にあのお方に鍛えられてないからな。

スバル「お嬢様。どうしてここに？」

奏「お花を摘みに行つたあなたがなかなか戻らないから、何かあつたんじやないかと思つて捜しにきたのよ」

涼円さんがそう言つと、スバル様は申し訳なさそうに頭を下げた。

奏「庭渡くん、腕、大丈夫かしら？それに顔が真っ青よ」

リオ「……だいじょぶ、だよ」

嘘だ。かなり痛い。言葉も上手く紡げない。身体の震えも頭痛も收まらない。オレはネクタイをはずし、腕に巻こうとしたのを止められた。

奏「駄目よ。そのままだといけないから保健室で消毒しましょう」

リオ「……ほけん、しつ、いくまでのあいだ、だけでもしけつ、し

たい。ジローも、はいば、なきやいけな、いし」

奏「そう、それなら私が

」

リオ「！？ いらない！ じぶんでやるからオレこそわらないでくれ！」

涼月さんがオレの手をとらうとしたが咄嗟に怒鳴ってしまった。

スバル「おまえ、お嬢様に向かって！」

奏「いいわ、スバル」

スバル「ですが！」

食つて掛かるスバル様を涼月さんが手で制してくれた。

リオ「……悪い。オレを心配してくれるのはわかるけど、今は逆効果なんだ。だから、放つておいてくれ」

だいぶ呼吸が落ち着いてきたから普通に話せるようになった。オレ

はワイシャツを脱ぎ、傷口にハンカチをあて、その上からネクタイをきつく巻いた。

奏「それはできないわ。私の執事があなたに怪我をさせた。それくらいの責任はとらせてもらわないと」

リオ「……わかった。なら、保健室に行こう。オレも聞きたいことあるし、そつちも聞きたい」とあるんだうし」

奏「話が早くて助かるわ」

オレはジローが汚れないように血塗れになつた手をワイシャツでくるみ、ジローを抱えて保健室へ向かつた。

×

リオ「失礼します」

奏・ス「失礼します」

ジローを抱えたまま保健室の扉を開けるオレに涼月さんとスバル様が続いて入る。

仲本「どうだー……って、庭渡君、どうしたのー!?それに坂町君もー!?

リオ「…………とりあえず、ベッドを借りてもいいですか?」

仲本「いいから早く坂町君を寝かしてこひたて座つてー!」

リオ「はい」

仲本「何をしたらこうなるのー!? 顔の方はたいしたことはないけど……腕の方は何針か縫わないといけないわ! 今すぐ病院に行かないでー!」

リオ「……病院は行きたくないです」

仲本「あなたの病院嫌いは知っているけど、今はそんなこと言つてはいる場合じゃないでしょー!?

奏「……少しよろしいですか、仲本先生？」

仲本「なにかしら？ 今は庭渡君の手当を」

奏「彼らは私に任せてもうえませんか？」

仲本「けど……え？」

「きやあ

リオ「え？」

涼月さんはあわてゝとか仲本先生を往復ビンタした。……それも札束で……。どういうことだ？ あの浪嵐学園男子の憧れの涼月奏が……。ヤバイ、目眩が……。

奏「さて、邪魔者は退散したわね」

スバル「……お嬢様……」

オレがトリップしてゐる間に仲本先生は保健室から出でていつたみたいだ。うん、ジローには悪いがオレも退散しよう。オレはそう決め行動に移るうと出口へ向かった。

“ だきつ

リオ「ひにっ！？」

突然、後ろから抱きしめられたことに情けない声を漏らしてしまった。背中に殺傷能力最大の一いつの凶器が押し付けられてるんですけど！？ やばい……全身に悪寒が……。

奏「どこに行くつもりかしり？」

涼円さんがオレの耳元で囁くよつとそつと。うわっ！？ ゾクゾクするう！

リオ「ちょ、ちょっと……かばんをとつ！」

あ、もうムリだ。うん。むじゅじゅまでもつたことに驚きだよ。よく頑張ったな、オレ！

スバル「え？ お、おい！」

限界を突破したようでオレの身体から力が抜けて、糸が切れた操り人形のように呆気なく倒れた。慌てるスバル様の声を聞きながらオレの意識はブラックアウトした。

### 第3話（前書き）

お気に入り登録してくれた皆様ありがとうございます。

### 第3話

リオ「く、来るなあああ！」

唐突に意識が覚醒した。横になりながら、ばくばくと拍動する心臓を左手で押さえつける。そう、あれ? とか自分の上げた悲鳴で目を覚ましていた。カツ「悪すきる。

リオ「……なんて、サイアクな目覚めだ」

サイアクだ。あの悪夢を見るなんて。

リオ「う、……つー？」

ヤ、ヤバい!? 頭からリバース信号が!! 周りを見るとゴミ箱を発見した。すぐに取らないと。俺はすぐさまゴミ箱を取ろうと右手を動かした。だが、突然、ジャラつと言ひ音と共に、右手の動きが止まる。

リオ「……ジャラ?」

これって、手錠……ですよね? なぜにオレの右手とベッドの柱を

しつかりと恋人同士のように繋いでるんだ？ オレ、拘束プレイはあまり好きじゃないんですけど？

リオ「…………」

えーっと、なんですかね。ひょっとして、オレはまだ夢を見ているのか。そんなことはとりあえずどうでもいいー。そのままじゃゴミ箱が取れないじゃないか！？

リオ「…………つ！？」

マズい！ リバース！ リバース信号が赤になりかけてますから！  
！ マジで喉まできますからあ！！！！

「リオ、早くこれに吐け！」

そんなジローらしき声の言葉とともにゴミ箱がオレの目の前に出現した。オレは「ゴミ箱をしつかりと持つてリバースを行った。

リオ「…………ゲボツ、ゴホツ…………！？」

ジロー「二人とも悪いけど」

「わかつてゐるわ」

誰かが出て行く気配がしたけど、今のオレには氣にする余裕はない。

ジロー「全部出して楽になれ」

ジローはオレがこうなるのに慣れてるから優しく背中を擦ってくれる。やはり持つべきものは幼馴染みで親友か。

ジロー「もう、大丈夫か?」

リオ「あ、ああ」

あれから十分くらい吐き続けたか……。事後処理も終え、ジローが窓を開けながら心配そうに訊くので、力ない笑みで返す。

ジロー「そつか。……涼月、近衛。もう大丈夫だから、入ってきてくれ」

涼月さんにスバル様？ なんであの一人がオレの家に……って、こ

「は俺の家じゃなく、オレが意味嫌う病室じゃないか。

奏「庭渡くん、大丈夫?」

スバル「……」

ジローが呼んだ人物が入ってきた。スバル様は気まずいのか無言だし。

リオ「……ジロー」

ジロー「リオのことを使むよ。俺は何か飲み物、買ってくるから」

ジローに状況説明を頼もうとしたがあろつことか目線を反らし、出て行きやがった。

奏「スバルも行ってきて」

スバル「かしこまりました」

涼月さんに言われ、スバル様はジローを追いかけつていった。待つ

てくれ！ ちよつ！？ オ、オレを女の子と「人つきり」しないでくれえ！！

奏「大丈夫かしら。その手錠、痛くない？ サイズ的には小さくないと思うんだけど」

リオ「……ん？」

ちょっと待て。この女、今何気にとんでもないことを言わなかっただけ？

奏「安心して、庭渡くん。手術は、無事成功したわ」

リオ「……なに？ それならオレも改造人間の仲間入りなのか！？」

奏「そうよ。あなたはもう普通の人とは違うわ。試しに『変身つ！』って叫んでみて。それであなたに秘められた力が解放されるから」「リオ「な、なんだと！？ よ、よし！ わかった！ いくぞ！ つて、やるわけないだろ！？」

オレは途中まで合わせていたがさすがにその先はないだろ？ 恥ず

かしそうもひつて。高校生にもなつて「変身つー」とか叫んじやつたりさ。そんなヤツがいるなら是非見たいね。

奏「く、あはは……」

笑い声が聞こえる。信じられないことに、あの涼円さんがお腹を押されて、窒息死しそうなくらいに悶えていた。

奏「く、ふふふ。いいノリシッ！」

「イツ、本当に涼円奏さんなのだらつか？　いつもとは印象が違うぞれなんですか？」

奏「でも、残念だわ。ジローくんみたいに叫んでくれると思ったのに」

……あ、いたんだ。しかも、かなり身近に。さすがだな、ジロー。オレはオマエを侮っていたよ。

リオ「あ、あの……涼円さん？ちよつと訊いてもいいか？」

奏「ふふ、何かしら庭渡くん。それともクラスのみんなみたいに」

リオ『 つて呼んだ方がいいかしら?』

ジロー「別に呼びやすい方で呼んでもらって構わないけど……」

奏「ありがとう、リオくん。話したい」とせこつぱこある感じから、ゆっくりでいいわよ」

リオ「じゃ、じゃあ、訊くぞ? オレの」とを繋いでのり、アンタ?」

奏「そうよ。あ、心配しないでね。私だけ怪我してる左手一本のあなたに犯されるつもりは毛頭ないから」

ジロー「アンタはオレをどんな人間だと思つてんだよー。そんな心配してねえよーーー」

誰がそんなことするか! 悲しいがオレにそんなことできるわけねぇんだよ。

リオ「…………やつこや、手術つて本当にしたのか?」

オレは丁寧に巻かれた包帯を見て笑ぐ。

奏「ええ。」<sup>1</sup>涼月家が経営してる病院だから最高のスタッフにやられたわ。傷痕は残らないから安心して」

リオ「そうか、なんか面倒掛けたみたいで悪いな。治療費は後で必ず返すよ」

奏「いろいろわ。あなたが私のお願ひを聞いてimatelyれば

涼月さんは静かに口唇を歪めた。……怖っ！　なんかすんじ怖いんですけどー！」

奏「そうね、最初はもううん去勢」

リオ「待った！　何が望みだ涼月やー。俺にできることならなんでもするぞー！」

認識を改めよ。コイツ、ただのお嬢様じゃない。ただのお嬢様が、こんなふざけた性格してるとわけがない……！　ってか、お願いが去勢つておかしいだろ！？　しかも、もううんつて言つたぞ！

奏「勘違いしないで。あなたが私にできぬことなんて何もないわ

はつきりと涼円さんは断言した。いや、まあ、そうなんですか？  
オレが何かできるだなんてこれっぽちも思えませんでしたけどね、  
本当。

奏「あなたを拘束しているのは、あなたが私の執事の秘密を知つて  
しまつたからよ」

ああ、やっぱりか。コイツとスバル様がいる時点で薄々やつじやな  
いかつて思つてたんだ。

## 第4話（前書き）

KEENちゃん、感想ありがと「ひー」れこます。

## 第4話

リオ「なあ……なんでスバル様って男の格好で学園に通つてるんだ？」

一番の疑問を訊ねた。コイツなら、全て知つているはずだ。否、知らないはずがない。なんたつてスバル様の主なんだから。

奏「強いて言つなら、家庭の事情ね」

リオ「家庭の事情？」

奏「ええ。あの娘の……スバルの家系の男子は代々私の家に執事として仕えてきたの。だから、あの娘も執事をしているのよ」

家系の男子？ つてことは、スバル様は……。オレの中である答えが導き出された。

リオ「そうか。それならしかたないか」

奏「あら？ これだけで納得できたの？」

涼月さんが意外そうに訊いてきた。

リオ「納得はできない。だけど、家庭の事情なんだろ？ スバル様とあまり親しくもないオレが深く訊いていいことじゃないだろ」

奏「それもそうね。話を戻すけど、私の父　つまりこの学園の理事長が、スバルが私の執事でいる為の条件を出したのよ。その条件が、三年間、誰にも女だと知られずに学園生活を終えるというもの。つまりそれくらいのことができないようじゃ女に涼月の執事は務まらない。きっとそう言いたかったんでしょうね」

リオ「……え？　ちょっと待った。それってつまり……」

奏「そう。スバルは今日、あなたたちに自分が女であることを知られてしまった。あの娘は自分が涼月の執事であることに並大抵じゃない拘りを持つてるの。だからあなたたちの口をどうにか封じようとした。……ごめんなさい。私の執事が迷惑をかけたわ」

リオ「……」

そうだったのか。だから、あんなにオレ達を殺そと必死になつてたんだ。いや、だけど、あれはれつきとした殺人未遂だぞ。犯罪者になつたら意味がないだろ。

ジロー「ほり、近衛。早く行けって」

スバル「だ、だけど……」

リオ「ん?」

ジアの方を見るとジローとスバル様がなんか押し問答していた。

リオ「何してんの?」

スバル「……あ、あの!?」

リオ「なに?」

スバル「い、いめんなさい!」

リオ「は?」

スバル「あのときは動搖してて……本当に悪気はなかつたんだ。そ

の、だから……怪我をさせじ「みんなさー。」

リオ「……」

おーおい、あのスバル様がオレに向かつて頭を下げんぞ。ゲキレ  
アじやね?

リオ「……イヤだ」

オレは低い声で呟いた。

スバル「え?」

リオ「……ジローは見たところ傷がなさそうだけど消火器で頭を殴  
られてるんだ。この後、どうなるかわからないんだぞ。眠つたら、  
二度と目が覚めないかもしけない」

ジロー「怖い」と囁つたよ

リオ「それにオレは」のザマだ。謝つただけで済まそつなんて虫が  
良過ぎるだろ」「

スバル「えっと……それは、その……」

リオ「こいつ来いよ。一発で済ませてやるから」

オレが拳を作るとスバル様はビクッとするが、覚悟を決めたのかオレの腕が届く距離に来た。流石は男装執事だな。

リオ「良い度胸だ。……いくぞ！」

スバル「……ツ！？」

スバル様は歯を食いしばつてる。

スバル「……？」

だが、覚悟した衝撃が来ないことに目を開けて首を傾げる。

“パシンッ！”

そんなスバル様にオレは渾身のパンチを放つ。

スバル「いたつ！」

リオ「ほら、今日はこれで赦してやるよ」

スバル「？……？？」

スバル様は額を両手で押さえて不思議がつていて。ドチクシヨー！  
メチャクチャカワайнんですけど。

リオ「だから、今回はデコピンで赦してやるって言つてんの。だけ  
どな、いくら秘密を守るためだからって暴力に走るのは止めろよ。  
次やつたら、本当にぶん殴るからな！」

スバル「う、うん」

リオ「わかつたならよし！」

“ナデナデ”

オレは安心させるように笑顔でスバル様の頭を撫でる。おーやつぱ

り、女の子の髪だー。撫で心地最高だな。

スバル「！？／／／」

ジロー「リオは相変わらず女に甘いよな」

オレとスバル様のやりとりを見て、ジローは呆れ氣味でそう言った。

リオ「親父と母さんからの教えを破るわけにいかないからな。女性には優しくあれってな。暴力なんてもつての他だ」

奏「……ふうん……」

リオ「な、なに？」

静かだと思った涼月さんが目を細めてオレを見ていた。ヤな予感がしたので涼月さんに訊こうとしたら……あらうことか、涼月さんがオレの腰辺りに馬乗りしてきた。

リオ「！？」

呼吸が止まる。軽い。鳥の羽のようだとまでは言わないけど、涼月

さんの身体は思ったより軽かった。

リオ「……ひょ、ちよっと！ 何してんですか、アンタはー…？」

奏「なにって、リオくんに馬乗りしただけよ」

長い見とれるくらいに綺麗な髪をいじりながら、涼月さんは脣下が  
りの「一ヒーブレイクの」とく落ち着いてらっしゃる。対するオレ  
は酸欠寸前の金魚みたいに口をパクつかせていた。というか酸欠ッ  
ス！

奏「リオくん。あなたって、特殊な体质らしいわね」

“ギクッ”

奏「ねえ、黙つているつもり？」

涼月判事による臨時裁判が開廷。被告人はもち、オレ。こうなった  
ら黙秘権だ。拘束されて動けない以上、屍のように無口になつてこ  
のピンチを乗り切るしかあるまい！

奏「別にいいわよ。それなら 身体に直接訊くから

リオ「は？」

驚くオレの腰の上で、彼女は口元を歪めた。その白い指がオレのシャツのボタンを次々と外していく。

リオ「お、おい！ なんで服を脱がすんだよ」

ヤバい、ヤバい！ 発作が！ 頭痛えし、呼吸が！！ 身体が尋常じゃないほど震えますからあーー！」

奏「静かにして。手元が狂つて内蔵を傷つけちゃうかもしれないでしょ？」「

リオ「さらっと、こわいこと……こつなやー！」

奏「ちなみに、私の握力は片手だけで八十キロを越えるわ

リオ「あきらかに、ウソ、ですよね！」

呼吸しづら一上に大声出してるせいかも体がなくなってる

よつな気がする。

奏「ふふ、バレちゃった。でも、大丈夫。私の家に代々受け継がれた拷問法の中に、肋骨を一本ずつ」

リオ「やめっ！ わかつた！ もう……わかつたから、オレにふれる、のは、やめて、くれませんかね〜〜〜！」

魂を込めた絶叫も、無情にも涼月さんには届かなかったらしい。はだけたシャツの隙間から、白い指がオレの肋骨の上をヘビみたいに這つていぐ。細い指先。冷ややかなその体温に、心臓が跳ねた。

“ドクンッ！”

あ、ヤバい、マズい。体温が急激に下がっていく感覚の中、涼月さんに触れられた箇所だけが熱を持った。……はい、アウトオー！

## 第5話（前書き）

あやせん、紫苑さん感想ありがとうござります。

## 第5話

奏「え？」

涼月さんの唖然とした声が漏れた。そりやそうだろう。自分の触れた所だけが異常に赤くなり、火傷するほどの熱を帯びているのだから。ちなみに、オレは脱力感からボ～とした感じで涼月さんを見ている。しかも、蕁麻疹が出たとこが異常に痒い。

奏「……本当にジローくんの言つ通りだつたのね。ジローくんのもだけど、アレルギーだとしたら訊いたことがない症状よね」

リオ「って、しつて、はあはあ……やつた、のかよ……」

奏「だつて、確かめる必要があるでしょう？ 激しい頭痛、身体の震え、過呼吸、蕁麻疹。ひどいときは戻してしまうんでしょ？ 女の子に触れられただけでこんな症状が出るなんて信じられなかつたのよ」

この人は悪魔か？ いや、そんなカワイイもんぢゃないな。魔王だ。  
これからはサタン涼月と呼ぼう。

リオ「……ジロオ、オ、魔王#」

ジロー「…………しかたなかつたんだ」

リオ「しかたないで……はあ……すますな。はあ、もういい。ジ  
ロー、から……オレのことは、きいたんだろ？　あえて、オレか、  
らは……せつめいしない、からな」

奏「ええ。つまり、『うこう』とでしょう。あなたは、女の子に触  
れられるのが怖くて怖くて仕方がないチキン野郎なのね」

リ・ジ「ぐ……」

グサッと心臓にナイフを突き立てられた気分だつた。ジローも同じ  
のようだ。歯に衣を着せないタイプだな。直球過ぎませんー？

奏「ねえ、そりでしょ」<sup>17</sup>、庭渡 理桜くん

リオ「！？」

「……このタイミングでフルネームだと、ま、まさかこの人……気  
付いたのか？　オレの名前の秘密に……！　いや、そんなはずない。  
オレのはジローみたいにストレートじゃない。わかるヤツはよっぽ

ど性格がヒネくれてる。

奏「どうかしたの？ 何か言つてよ、庭渡 理桜くん」

リオ「……」

奏「ニワコオウくん？」

リオ「……」

奏「ニワコアリ、オウくん？」

リオ「……」

奏「チギングくん？」

リオ「うわああああああっ！」

耐え切れずに、オレは絶叫していた。

スバル「チキング？」

リオ「ヤメロ！ そのなで、オレをよぶなつー。」

ジロー「リオも俺と同じなんだよ。庭渡理桜。—ワトリ、オウ。—ワトツを英訳するど？」

スバル「……チキン……」

ジロー「オウは王様でキング。それを合わせてチキング。曲解だけ  
ど、チキンの王様だ」

オマエだけには言われたくないわ、ジロー！

奏「ヒーリング、リオくん」

急に涼風さんの雰囲気が変わった。

奏「あなた、自分の恐怖症を治したいとは思わない？」

リオ「…………そりゃあ、オレだって…………は…………なおしたじよ

この体质が治らない限り、オレのそれやらかな夢も叶えられないからな。

奏「だったら、手伝つてあげましょうか?」

リオ「それは、ありがたい、けど……。なにが、のぞみだ?」

奏「リオくんは頭の回転が早いのね」

リオ「どうも。で?」

奏「スバルが女の子だってことを、誰にも言わないで欲しいの」

たとえ死んでもね、なんて物騒な言葉が付け足された。要はオレがスバル様の秘密を死守する代わりに、涼月さん達はオレの女性恐怖症を治す手伝いをしてくれることにな。

奏「あなたたちがスバルの秘密を知ってしまったことは、まだ父の耳に入っていない。あなたたちが秘密を守れば、私たちが条件を破つてしまつたことを知られることはないわ」

リオ「いいふらす、しゅみんなて……まあ……ないけ、ビセ……メ  
チヤ、ふせい、ははあ……ですよね？」

奏「バレなければいいのよ。どひ？ 私たちと協定を結ぶ？ ちな  
みにジローくんは協定済みよ」

リオ「きょひで……ははあ……って、いつより、きょひはんだ  
な。でも、じとわったり、したら……ははあ……ふじの、じゅか  
い、いき、だらうじ……オレたちが、スバルさまの、ひみつを…  
バラしたら、オレたちが、バラされるんだらうじ……」

もひ、喋るのもしんどい。つか、早く退いて欲しいんですけど。ジ  
ロー→アイコンタクトをする。

ジロー「……リオも涼月の話に乗るつて。リオ、近衛ほせの命令で  
従つらしこぞ」

リオ「おう」

ジローはオレの気になつてゐることを語ってくれた。なり、安心か。

奏「ふふ。じゃあ決まりね

なぜか涼用さんはやけに楽しそうに笑っていた。うふ、ヤな予感しかしないよ？

奏「とこひでリオくん。話したいんだけど、あなたの女性恐怖症の症状ってどんな時に出るの？ 出てからも女子に触られ続けたらどうなるの？」

リオ「え？ ん、しようじょうがでるのは……ふいつぢで、ふれられたときと……ちよじかんで、きょくどい、せつしょくじ、かな？」

それと、言わないけど半脱ぎで迫られたりしたらマジでヤバいね。触れてないのに発作が出るからな。これだけはジローよりもチキンなのを認めよう。

ジロー「さわられついだらると、たえきれなく……なつてしつしんするね」

ジロー「……リオ、『愁傷さま』

事実、保健室で涼用さんに抱きつかれて失神したしな。それとジロー、なに手を合わせて不吉なことを呟いていやがる…

リオ「けど、それがどう

と。そこまで言つてオレは黙つた。正確には黙らせられた。涼月さんの指が、再びオレの肋骨に伸ばされていた。

リオ「あ、あの、すずつきさん？」

奏「心配しないで、リオくん。これは実験よ。今後の為にも、あなたの身体がどこまで耐えられるのか試さなくちゃいけないの」

三田円のように笑うサタン涼月。ヤバい。コイツ、明らかに面白がつてやがる。

リオ「や、やめーーーそんな、ことしなくても……ふ、ひあんつーーー！」

奏「うふふ。ちょっと触つただけなのに可愛い声を出すのね

細くて長い指がわきわきと肌の上を這いずり回つていいく。……ダメだ。傍から見れば天国のようなシチュだが、女性恐怖症チキン症候群のオレにとってはただの拷問だ！ 視界はすでにブラックアウト寸前。このままだったら魂があの世へ旅立つ。

リオ「た、たすけて、くれ、ジロー！　スバルさま……」のまま、  
じゅ……ホントに、ムリ！」

掠れた声で精一杯、二人にSOSを出すが

ジロー「スマン、リオ。俺には荷が重い……」

スバル「……ボクは執事だ。お嬢様の命令は絶対なんだ」

目を反らされた。

リオ「そんなこと、いわずに！　たのむから……オレを、みすてな  
ひやああんつ！」

奏「あら、リオくんったらこんな所に切り傷があるのね。それにジ  
ローくんの家族に鍛えられてるだけあって身体が締まってる。これ  
なら、失神した後も楽しめそうね」

うふふっ、と響き渡る笑い声。何を楽しむつもりなんだよ！  
……ああ、今日からこんな生活がオレの日常になるのか。徐々に遠  
のしていく意識。その中で、オレは神様に自分の貞操の無事を祈つ

ておこた

## 第6話（前書き）

今回は少し短いです。

## 第6話

どんなに暗い夜もいつかは明ける。どんなに明日が嫌でも朝はやつてくる。そんなわけでオレは自分の部屋の時計を見た。ただいまの時刻は朝の六時半。うん、いつもの時間だ。……それより、オレはどうやって家に帰つてこれたんだ？　まあ、気にしちゃいけないよな。

リオ「ん？　雨か」

窓の外からは雨音。昨夜までは降つていなかつたが、今朝の天気は俺の心の中のよつこ憂鬱らしい。

リオ「……シャワーでも浴びてさつぱつとするか。昨日のままみたいだし」

自分の格好を見ると制服のままだつた。カツラもカラコンも着けたままかよ。カラコン着けたまま寝るのつて怖いんだけど。とりあえず、タオルと着替えを持って脱衣所へ向かう。

リオ「……毎日、かつたるいんだよな……」

鏡の前に立ち、カツラとカラコンをはずす。すると、本来の自分が

鏡に映る。灰色の髪に灰色の瞳。目立つよな、これ。母さんが歐州系のハーフだつたんだけど、その血を強く色濃く受け継いでしまつたらしい。顔は親父似なんだけどな。この姿を知るのは学園ではジローとジローの妹である紅羽<sup>クラベ</sup>。そして中学一年からずっと同じクラスの腐れ縁の黒瀬 ヤマト《クロセ ヤマト》。この三人だけだ。

リオ「気合……入れねえとな」

自分に言い聞かせるように呟いた。心機一転して気持ちを引き締めないと。なにせ、今日から始まるのだ。涼月奏による、オレたちの治療プログラムが……。昨日の病室。あのときはなんとか無事に切り抜けた……はず。だが、もはや学園に心の休まる場所はない。つまり、この家だけがオレの最後のオアシスだ。ならば、せめてこの安息だけは噛み締めねば。

リオ「さて、早くシャワー浴びて、朝食作んねえと」

オレは服を乱雑に脱ぎ捨てて浴室へ入った。

×

リオ「……ん？」

“ピンポン”

脱衣所で濡れた髪をタオルで拭いていると呼び鈴がなつた。こんな朝から誰だ？ ジローか？ なら、このままいいか。

『ピンポーン×5』

リオ「だあー！ 聞こえてるつての…… しつこいや、ジ、口ウ？」

『バンツ！』

玄関を勢いよく開ける。

リオ「……」

オレは言葉を失う。そこにいたのはチキン・ジローなんかじゃなく、  
クールビューティー涼月奏がいた。

奏「……／／／」

なぜか涼月さんも沈黙していた。しかも、心なしか頬が赤く染まつ  
ていた。……状況を確認しよう。呼び鈴を押したのはジローではなく  
涼月さん。そして、ジローだと勝手に判断したオレは、シャワー

を浴びた後だから 上半身裸で頭にタオルをかけていた。……うん、涼月さんの頬が赤くなる理由はわかつたよな、オレ。

リオ「…………わやあああああ！？／／／」

気がついたら、オレは女の子のような悲鳴をあげていた。

奏「く、あはは……。さつきの悲鳴……。く、ふふふ。女の子みた  
いで。リオくん、可愛いかったわ……。あは、あはは。」

リオ「そ、そんなに笑わなくつたつていいだろ！／／／」

涼月さんが笑い泣きをしていた。オレは半泣きで怒鳴っていた。

奏「あ、あはは……。だ、だって……普通、悲鳴をあげるの女の子  
である私の立場なの……」

リオ「しかたないですよね！ オレ、裸見られたんですけど！…／  
／／

奏「いいじゃない。昨日も見たわけだし。減るものでもないんじゃ  
ない。」

リオ「減る！なんか大切なモンが減りますからあー！」

なんでだろう。この人には恥じらいと言ひ言葉がないような気がし  
てならないんです。さつき、頬が赤くなつたのは、オレの氣のせい  
だつたんだ。

奏「大丈夫よ」

リオ「なにが？」

奏「……」

リオ「…………はあ…………もづいいよ。それでこんな朝っぱらからなんの  
用？」

なにが大丈夫かわからんけど、これ以上は疲れるから話を変える。

奏「これからあなたたちが秘密をバラさないよ、できるだけ監視することになったの。それで見張りながら一緒に登校しようと頼つてね」

リオ「涼円さん直々に? それにつけてスバル様にやられるとこじゃねえの?」

奏「スバルはジローハンのところだ」

リオ「なるほど。ジローハンは毎日通勤なこのな」

「ああ、色々あるのよ」

オレの言葉に涼円さんが困ったみたいに顔をしかめた。

リオ「ふーん……まあ、深くは聞かないけどな。ところで涼円さんは飯食べてるんだよな?」

奏「食べないわ。リオさんのところから走り回るつとめてね」

リオ「別にオレは構わないけど。涼円さんの口に合つかは知らない

ぞ

そつぱー、涼田さんの前にこつもの朝食を出づ、涼田さんの向かいに座る。

「兄わあーーん！ めひだよお~~~~~」

“ドカンッ！”

突然、爆竹みたいな声が轟いてきた。相変わらず朝からトンショングの高いな。

紅羽「うつやあああつー。」

ジロー「うふはつー。」

紅羽「おはよつ兄わんつー。えーい、アンクルロックー。」

ジロー「うわやああつー。」

紅羽「そりで続けてシテエ！」

ジロー「ちよ、まつ……あはああああああっ！」

紅羽「せりとそこからチャヨークスリパー！ そしてトドメの腕ひじき逆十手！」

ジロー「ああああああっ！」

ジローの悲鳴と紅羽の技名が響き渡る。うん、いつも通りの朝だな。田の前にいる涼月さんは驚いたような呆気に取られたような顔をしていた。まあ、初めてだとそうなるよな。

## 第7話（前書き）

リオ「更新したぜ」

## 第7話

奏「といひで

リオ「ん？ 何？」

食べ終わった一人分の食器を洗つてると、コーヒーを優雅に飲んでる涼月さんがそう言った。

奏「その姿はなにかしら？」

リオ「何つて？ ハプロン姿のこと？ 料理するときや洗い物するときは普通じゃないか」

オレは自分のエプロンを見て、首を傾げた。そんなにオレってエプロン似合わないかな？ って、男のエプロン姿なんぞ、似合わないわな。

奏「そりぢゃないわ

リオ「そりぢゃない？」

何？ オレなんか変な姿してたっけ？

奏「その髪と瞳のことでよ」

リオ「…………」

髪と瞳？

リオ「…………あ！？」

やべっ！ カツラすんの忘れてた！？ ってか、あんな格好で出迎えに行つたら、まかしよつないからびつちみぢみ涼円さんにはバレるか。

奏「氣づかなかったのね」

オレの様子に涼円さんをほくそと笑った。

リオ「あ、うん。朝からジローたち以外と会つことなんてなかつたからさ」

「マジで油断してたぜ。」

奏「いつもは変装してたの？」

リオ「まあな。こんな色だと何かと立つしゃ。結構、絡まれたりするからメンバーなんだぞ」

奏「絡まるる？」

リオ「そ。ヤンキーたちにいちゃもんつけられてボコられるんだよ。オレ一人に対してだいたい四、五人でかかってくるだぜ」

ま、その度に返り討ちにしてるんだけどさ。ちようど、イライラが最高潮の時に来るから、いいストレス解消になるしな。正当防衛になるからオレに非はない。

リオ「それに、こんな髪色じゃ教師たちに文句言われるのに見えてるし。生まれつきだって説明してもウソって言われるし。地毛って認められても黒に染めてこいつて言われるのがオチだしさ」

奏「たしかにそうね。リオくんはどこかのハーフなの？」

リオ「んや、オレはクオーター。母さんが歐州系のハーフだつたん  
だらしいんだ」

奏「知つてる人はいるの？」

リオ「坂町家と同じクラスの黒瀬ヤマトくらいだな。あ、そうだ。  
理事長にはこのこと、黙つてもらつていいかな？」

奏「ええ、別にいいわよ。あなたが私の要件を飲んでくれたらね」

リオ「わかってるって。んで、その要件ってのは？」

奏「私にこの家の出入りを自由にさせほしいの」

リオ「それだけ？」

正直、もつとヤバイのかと思つた。

奏「ええ。どうかしら？」

リオ「オレは全然オッケーだよ。」

オレ的にはかなり嬉しいからな。

奏「交渉成立ね」

リオ「あ、カギはいつもポストの中だから。合鍵とか作んなくて大丈夫だぞ」

奏「リオくん」

リオ「ん?」

奏「不用心よ。カギは持ち歩きなやー」

リオ「はい、わかりました。」

涼月さんの目がマジだったのでオレは即答で頷いてしまった。けど、カギ持ち歩くのメンドーなんだよな。

奏「リオくん」

オレの名を呼ぶ涼月さんの声色がワントーン下がった気がする。この人はオレの思考を読んでたりするんですか？

リオ「……心配してくれてありがと。それと、さ」

奏「なにかしら？」

リオ「すー……はー……」

オレは深呼吸をしてから勇気を出して、涼月さんに伝えたかった言葉を言ひ。

リオ「オ、オレの初めての女になつてください！」

奏「え、ええっ！？／＼／＼／＼」

精一杯の勇気を出したオレの言葉に驚いて涼月さんの顔が赤くなつた。驚く涼月さんもカワイイ。……じゃなくて、なんで？

奏「リ、リオくん……初めての女つてどうこうとかしら？／＼／＼」

涼月さんに言われ、自分の犯した間違いに気づく。言葉が足りてね  
えよ、オレ！－ どんだけテンパつてんですか！？

奏「……女友達ね。そうよね」

リオ「え、え」と、ダメ、かな?」

奏「もちろんいいわ」

リオ「ホントー やつた～！！」

オレは嬉しさからガツツポーズをしていた。この体質を知られる怖さから女友達なんてなかなか作れなかつたもんな。

奏「リオくんつたら大袈裟よ」

リオ「すごい嬉しいじゃんか！ だつて初めてできた女友達が君みたいなすごい美人なんだぜ これからよろしくな。か……」

奏「か？」

リオ「か、奏／／／」

うう……／／／ メチャクチャ顔が熱い……。それに声、裏返つてなかつたか？ 女の人を名前で呼ぶのってこんなに恥ずかしいことだつたか？ 紅羽を呼ぶときはなんともないのに。

奏「うふふ、よろしくねリオくん」

リオ「あ、ああ／／／」

涼月 じゃなくて、奏はふわりと柔らかい笑顔で微笑んだ。ヤバい、ヤバいね。メチャクチャカワイイんですけど！ この笑顔で心が満たされるや 今ならサタンじゃなくてエンジルって言える！

ジロー「わわわあああああっ！ 田がつ！ 田があつー！」

リオ「……」

ジロー……。オマエ、朝から叫びすぎだからな。田に何があつたん

だ？ ってか、オレの幸せな気分をブチ壊すんじゃねえ！

奏「スバルとなにがあつたみたいね。後でスバルに確認を取らなく  
ちや」

リオ「なんか楽しそうだな

奏はさつきの笑顔とは違ついたイタズラっぽい笑顔を浮かべていた。  
素材が良いと、どんな表情でも惹き付けられるからズルいよな。

奏「だつて、ジローくんなり面白ことしてそつだもの

リオ「……たしかに。ジローならしてそつだな。ひとつ、もつもつち  
ろ学園に行かないとな」

時計を見るといつも家を出る時間だった。

奏「あらっ。ジローくんを助けに行かないの？」

リオ「行かない。行きたくない。今、行つたら絶対ジローと同じ田  
にあいそだもん。下手したら朝から発作が出て学園に行けなくな  
るもの」

奏「賢明な判断ね」

リオ「だろ。奏はいつもリムジンで登校なんだよな？」

奏「違うわ。今日は歩いて行こうと迷つて。リオくん、一緒に行きまじょっ」

リオ「マジー？ んじゃ五分…いや、一分待つて…すぐこ支度するから！」

オレはカツラとカラコン装着と鞄を取る為に部屋までダッシュした。

奏「……リオくんたら、カツコに顔して時々カワイイ」とあるんだから。ちょっとビックリしちゃうじゃない／＼」

## 第7話（後書き）

誤字脱字・感想・アドバイスがありましたらお願いします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4056y/>

---

迷えるカノジョとチキンなオレと

2011年11月24日20時47分発行